
メアのゆりかご

遠野秀一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メアのゆりかご

【Nコード】

N0342Y

【作者名】

遠野秀一

【あらすじ】

国崎小夜子が目を覚ますと、そこは悪夢のような世界だった。

白濁色の空に包まれ、漆黒の月が浮かび、血塗れとなった学校。襲い掛かってくる黒い影の怪物達。覚醒者^{ウェイカー}として新たな力を手にした友人達。

そして、八年前に一度だけ出会った想い出の少年、真城礼夢との再会。

元の世界へと戻りたいと願う仲間達は力を合わせ、この悪夢のよう

な世界に挑む。

果たして、小夜子達は元の世界へと戻ることが出来るのだろうか！
？

Prologue

Prologue

世界の終焉が始まった。

灰色の世界に亀裂が入り、全てが無に帰そうとしていた。

砕け散る世界の欠片はまるで粉雪のように舞い落ちていく。世界の崩壊は冬の到来に似ていた。一つ違う点を挙げるなら、散り逝く粒子は降り積もることなく、静かに消え去ってしまう点だろう。

もはや崩壊を止める術はない。

だが、それを選んだのは私自身の意志だった。

もう目を逸らしたい現実からは逃げない。自らの足で立ち上がり、どんな過酷な運命であっても立ち向かうと決めた。たとえ、自らの世界を壊すことになるうとも、受け入れなければいけない現実があるのだから。

そして、私にそれを教えてくれたのは、彼だった。

彼は私を拒絶するように背を向け、粉雪のように舞い散る世界の欠片を見上げていた。燃え盛るような真紅の髪は風に揺られ、この世界の命を象徴する灯火のようだった。

終焉が始まった世界を見据えた彼は何を想っているのだろうか。きっと私には彼の気持ちを理解することが出来ないだろう。私と彼では存在そのものが違うのだから。

「……いつまで寝惚けた面で突っ立っているんだ？ さっさと失せろ」

彼は相変わらず口が悪い。

だが、その乱暴な言葉の裏にある優しさは確かに感じられた。彼が言うように、いつまでも私はこの場所にはいられない。いるべきではない。崩壊した世界からは一刻も早く立ち去るべきだ。

だが、私が終わり逝く世界から踏み出せないのには理由があった。

「どうして……、一緒に行けないの……？」

「……寝惚けんな。俺はそういう存在だ」

それは知っている。

そんなことは痛いほどに思い知らされた。

だけど、私が言いたいことはそんなことではない。

私と彼は生きていく世界が違う。世界の理によって私達は共に生きる道を絶たれた。

いや、それを絶つたのは私自身の意志だ。この別離は私自身の意志によって起きたものだ。だけど、私にそう決意させたのは、やはり彼だった。

「……お前のいるべき場所はここじゃない」

「わかってるよ！！ だけど……、だけど……、それでも一緒にいたいって願っちゃいけないの！？ 私はただ貴方と一緒にいたいんだよ！！！」

思わず零れたのは、偽らざる私の本音だった。

偽らざる本音であったが、内容はあまりに恥ずかしかった。私は咄

嗟に口を押さえたが、一度零れ出た言葉が戻ることはなかった。あまりの気恥ずかしさで私は頬どころか耳まで真っ赤になった。

彼は鬱陶しそうに溜め息を吐き、不機嫌そうな顔をこちらに向けた。もう説明するまでもないと思うが、彼は非常に口が悪い。どんな嫌味を言われるかわかったものではない。私は真っ赤に火照った頬を隠し、さっと彼の視線から逃げた。

しかし、彼の言葉は私の予想を見事に裏切った。

「…………俺だつてそうだ」

「えっ…………？」

あまりに意外な言葉だったので、私は自分の耳を疑ってしまった。顔を上げると、彼の穢れなき真紅の瞳が真っ直ぐに私を見据えていた。不機嫌そうで、いつも眉間にしわが寄った彼の表情。でも、その瞳には私だけに向けた優しさ秘められていた。

「俺はお前を守るために生まれた」

「……………」

初めてそのセリフを聞いた時、私は胸を高鳴らせた。だけど、全てを知った今ではもう同じ気持ちにはなれなかった。胸が締め付けられる。彼の存在意義を決めてしまったのは、私のエゴだ。拭いされない罪悪感が押し潰されそうだった。

「だから、今までずっとお前の側にいられないことをもどかしいと思っていた。だけど、お前がこの世界に来て…………、短い間だけど、一緒にいられたことを心地いいと思ってしまった。だけど、俺達は本来、一緒にいてはいけない……………」

こんな時だけ素直にならないでほしい。

最期のお別れなのだと思いきらされる。

本当はずっと一緒にいたいのに、どうして世界は私達を別つのだらうか。

「わかってるよ……。だけど、理屈じゃないんだよ……。一緒にいたいって気持ちは、理屈なんかじゃないんだよ！！　ワガママだつてわかってるけど、ずっと一緒にいたいんだよ！！　どうして、どうして私達は……」

私の叫びが世界に響いた瞬間、まるで私の想いを断ち切るような悲鳴を上げた。

断末魔の雄叫びを上げる大地は、私と彼との間を真っ二つに裂いた。

悲しかった。世界は私達を認めないよう。

悔しかった。世界が私達を拒絶するよう。

私には私の進むべき道がある。その道を行かなければいけない理屈もわかる。だけど、たった一人の少年と一緒にいたいと思う願いを犠牲にしないといけないのか。

「お前の気持ちは痛いほどわかるさ。だが、世界はそんな願いを平気で踏み躪る。……いいからさっさと目を覚ませ。いつまでも寝惚けてんな」

私を突き放すようにそう言い捨てると、彼は踵を返して私に背を向けた。

そして、崩壊の中心へと歩き出してしまった。無明の闇へ消え去る

うとしていた。

あの崩落の闇に行ってしまったえば、もう私達は永遠に会えないだろう。

「行かないで、 ツー！」

必死に彼の名を叫んだ。

喉の限界など忘れて、声が枯れることを恐れずに。

私の声は届いているはずなのに、彼は決して振り返ることはなかった。

ただ、小さく手を上げて、私に別れを告げた。

別れの言葉なんて聞きたくない。

私が聞きたいのは……、

「……じゃあな、小夜子……。永遠にお別れだ……」

光が爆ぜた。

目を焼き潰すような凄まじい白光に弾き飛ばされ、私の存在は世界から拒絶された。世界から遠ざかるほどに私の存在は分解され、光

の粒子となって元いるべき世界のモノへ書き換えられていった。

永遠の別離。

もう私があの世界に触れることは絶対に叶わない。もはや私の存在はあの世界の一部ではなくなってしまうたのだから。

あの世界の一部であった彼とは、もう絶対に会えるはずがなかった。

私は光の粒子になりながら必死に叫んだ。もはや叫ぶ喉がないとしても、声を伝える大気がなくても、私はありつたけの想いを叫んだ。

ツッ!!

そして、私の意識はそこで途絶えた。

T o b e c o n t i n u e d

第一夜 白夜の世界

どうして、こんなことになってしまったのだろう……？

目の前に起きた現実を受け入れられず、ただひたすらに逃げ続ける。ついさつきまで当たり前前に続くと思っていた世界が一瞬にして崩壊し、これまでの常識が全く通用しない世界に変わってしまった。

ここは白夜の世界。

悪夢が現実化したような異世界だった。

私知知っている世界を模していながら、全く非なる悪意に満ちた世界だった。

私達がこの世界に呑み込まれた理由はわからない。だけど、厳然とした現実として私達は今、この理不尽に満ちた悪夢の世界にいた。そこで私達は殺戮と暴虐の限りを尽くす黒い影達に襲われていた。

黒い影。私達の世界には存在しない化け物達。

突如引き込まれた世界の中で出会った悪夢の具象は、容赦なく私達に襲い掛かってきた。黒い影は人間を襲い、食らうためだけの存在だった。黒い影はどこまでも私達を追ってきて、目の前で幾度となく人々が蹂躪される場面を目撃してしまった。

黒い影に襲われた人々が漏らす断末魔を拒むように耳を塞ぎ、眼前に広がる惨劇を否定するように目を瞑り、ただ死にたくないという想いで逃げ続けた。

信じられない、こんな非現実な世界を。

認められない、こんな理不尽な世界を。

ただ、この悪夢の世界に抗うには私達はあまりに無力だった。一体私達の世界に何が起きたというのか。そして、どうして私達はこの異常な世界に引き摺り込まれたのだろうか。

始まりは突然だった。

あまりに突然過ぎて、理解できなかった。

前後の記憶は完全に欠落しており、気付けば私達はこの世界に放り込まれていた。

「……ここ、ここは？」

気が付けば、私はどこか屋外に寝転がっていた。

何故、外で寝ていたのかは全く思い出せなかった。それ以前に意識を取り戻す寸前の記憶が空っぽだった。どうして私はここにいるのか、それまで何をしていたのかは全く思い出せなかった。

脈絡もなく夢が始まるように、私は突然奇妙な世界に放り込まれていた。

世界の異常にはすぐに気付いた。

目の前に広がる大空が、乳白色に塗り潰された。

空が白いと言っても、白雲が空を覆っているのではなく、空自体の色がまるで絵の具で塗り潰されたように白いのだ。私知っている曇り空とは、似て非なる異質な空だった。

そして、一番奇妙なのは黒い三日月だった。

純白の空を嘲るような漆黒の月。その周囲には星一つなく、月の異様さだけが際立っていた。言いようも知れない不気味さを感じる。

ここは一体どこなのか。そして、どうして私はこんな場所にいるのか。

事が始まる前後の記憶はなかったが、それ以外の記憶はしっかりとしていた。当然、自分が誰なのかははっきりとわかっている。

私の名前は、国崎小夜子。

霞ヶ原高校一年。陸上部に所属していて、長距離走の専門。趣味はスポーツ全般、特に走ることが好きだった。好きな物は、お汁粉。嫌いな物は、掃除と数学。

意識を整理して少しだけ冷静さを取り戻すことが出来た。そして、周囲の確認さえ忘れていたことによく気付いた。

「ここは、……学校？」

辺りを見渡して、私は愕然とした。

そこは見慣れた私の学校、霞ヶ原高校だった。

私が寝ていたのは、陸上部が練習場としている周回トラックの真ん中だった。うちの高校は陸上の強豪校なので、グラウンドも相当な広さだった。私はそんな広大なグラウンドの中心で一人寝ていたら

しい。

……私は目を覚ます前、一体何をしていたのだろうか？

服装を確認すると、何故か高校の制服だった。学校にいるのだから制服なのは不思議ではないが、そもそも学校にいること自体が不思議だった。

だって、私は……………。

……………？

今、何かおかしなことを考えた気がした。だけど、その考えを思い返すことが出来なかった。まるで私自身が考えることを拒絶しているような感覚に襲われた。

何か強烈な違和感を覚える。この違和感の正体は何なのだろうか。

「……………まあ、いつか」

面倒になったので、思考することを放棄した。

ヒョイっと身体をバネのようにして飛び起き、軽く腕を伸ばしてストレッチをした。やはり、訳のわからないことを考えているより身体を動かしている方が気持ちよかった。

改めて周囲を見渡し、ここが私の知っている霞ヶ原高校と寸分違わないことを確認した。それと、グラウンド内には誰もいなかったことも。

空を見上げると、不気味な黒月が嘲りの笑みを浮かべていた。

あの月を見てみると、ここが嫌でも別世界だと思い込まされてしま
う。普通なら、別世界にいるという発想ではなく、空に異常が起き
たと思うはずだろう。しかし、何故かあの月にはここが異世界であ
ると思わせる強い暗示のような力がある気がした。

「それにしても、誰もいないなあ……。まさか、この世界には私し
かないの……？」

嫌な想像が脳裏を過ぎり、背筋がブルツと震えた。

こんな意味不明な場所で一人きりなんて絶対に嫌だった。

「……とりあえず人を探そうかな」

私はそう決心をして、グラウンドから校舎に向けて歩き出した。陸
上競技用の周回トラックを抜けて、階段を上っていく。高い所まで
登ると視界が変わり、見える景色も変わった。

すると、案外あっさり人影を見つけられた。校舎と体育館を繋げ
る通路に人影が見えた。その人影は何かを探すようにキョロキョロ
と見渡していた。

……よかった、私は一人ではない。

人影を見つけて、私は安堵の息を漏らした。

「えっ……？ 何、あれ……？」

その安堵の息が凍り付いたのは、人影が人間ではないと気付いてし
まったからだ。

それを何と形容すればいいのかと問われれば、黒い影としか言えな

いだろう。地面に映るはず影が這い上がり、本来いるべき人間の位置を奪って地上に立っていた。

黒い影の首がグニヤリと百八十度曲がり、私を発見した。人間では有り得ない首の動きだった。首と共に身体も半回転して、私の方に振り向いた。その動作が完全に人間の可動範囲の限界を超えた行為なのは明白だった。

「クカカカ……」

それは黒い影の笑い声のようだった。人の声に近いが、何かが根本的に違う不気味な違和感がある声だった。

明確に感じる悪意。そして、それ以上に感じるのは歓喜だった。あの黒い影は、まるで獲物を見つけた獣のように歓喜していた。いや、獣は獲物に気付かれないよう密かに行動をするものだ。たとえ、歓喜のような感情があつたとしても、それを獲物に見せるような真似は絶対にしない。

害意を孕んだ歓喜を見せることは、獲物を必要以上に恐怖させることだ。そんなことをすれば、狩りの成功率を下げるだけだ。獣にとって狩りは生存行動であり、そのようなリスクを取ることは絶対がない。何より無駄としか言えない行為だ。

黒い影の行動は獣的ではない。

無駄な行動を見せて、余裕を楽しむものは人間的な行動だ。

今から貴様を襲う。せいぜい怯えて逃げ惑え。逃げたところで無駄だがな。

あの黒い影はそう言っているような気がした。そして、それを理解した瞬間、私は無我夢中で逃げ出していた。黒い影は当たり前のように私を追ってきた。周囲に私以外は誰もいないのだから狙われているのは当然私だった。

追われる理由は皆目見当もつかなかった。

ただ、あの黒い影に捕まればロクな目に遭わないのは確かだった。黒い影は明白な悪意を孕んでいた。理屈ではなく生存本能がそう感じた。未開の森で大型肉食獣と鉢合わせたかのように、逃げなければ殺される、と問答無用で理解した。

怖い……。

怖い怖い……。

怖い怖い怖い……。

私はペース配分など無視して、死に物狂いで逃げ続けた。

心臓が爆発しそうだったが、それでも今は全力で走らなければならなかった。振り返るまでもなく黒い影が近付いているのがわかった。

ズズズ……、とまるで地面を這うような音が絶えず後方から聞こえてきた。

どのような挙動をすれば、そんな音が出るか気になったが、振り返る余裕などなかった。どれだけ全力で走っても音は次第に近付いてきて、恐怖と絶望が膨らんでいくのがわかった。もうすぐ背後まで迫っている。それなのに、黒い影はただ私の後ろに張り付き続けた。

「クカカカ……」

すぐ耳元から声が聞こえた。
悲鳴と涙が零れそうになるが、歯を食いしばって限界以上に足を速めた。

この黒い影はもう私のすぐ後ろにいるのに、獲物である私に襲い掛かるうとはしなかった。無論、このまま襲われないなんてことはないだろう。

黒い影は遊んでいるのだ。

私が力尽きる瞬間まで追い続け、無様に命乞いをする姿を嘲笑いながら、
。それ以上の想像は、脳が思考をすることを拒否した。考えうる可能性は幾つもあったが、具体的にそれをイメージしてしまえば、もう心が折れてしまう。

鉄筋コンクリート製の新校舎沿いを疾駆し、そのまま歴史を感じさせる古めかしい校門を目指した。校門の先は桜並木になっていて、そこから市街地に続いていた。とにかく、こんな化け物がいる学校から逃げ出さたくて校門を目指した。

しかし、校門に近づくにつれて気付いてしまった。

本来あるべき校門の先の桜並木がなかった。

何故……、どうして……？

校門から先は、あの不気味な空と同じように白一面に染まっていた。それ以外は何もなく、校門から先に出たらどうなるかさえ想像できなかった。

あそこに飛び込む勇気は湧かなかった。だが、他にどこに行けば……。

思考に迷いが生じた瞬間、ニユルツと何かが右足に絡み付いた。続いて左足にめめつた何かに掴まれた。両足の自由を奪われ、私はそのまま地面に転倒した。

かろうじて顔面を庇うことは出来たが、それだけだった。

両足を掴まれた。

……誰に？

そんなことを考えるのは愚問だった。今この場には私と、黒い影しかいなかった。ガシツと掴まれた両足はまるで万力で締め付けられているようだった。異常な力で掴まれており、抵抗のために暴れることさえ出来なかった。

もう逃げられないと悟る。

恐怖によつて全身は小刻みに震え、ガタガタと歯が打ち鳴り始めた。黒い影は私の両足を掴みながら身を乗り出し、私の耳元まで顔を近づけた。腐敗した死肉のような吐息が顔に掛かり、猛烈な吐き気が込み上げた。

「クカカカ……」

「あつ……、あああ……」

私はその声に引かれるように振り返ってしまった。

眼前には黒で塗り潰された楕円の顔らしきモノがあった。眼も鼻も凹凸のない顔だったが、パカアと開いた口だけはあった。そこから血生臭い吐息が漏れていた。そして、その口には真っ赤な肉片が幾つもこびり付いていた。

どうして振り返ってしまったのだろう。こんな間近で黒い影の顔を見て、この口にこびりついた肉片の存在など知らなければ、これか

ら行われる惨劇を想像せずにいられたはずだろう。
いや、見ても見なくても同じだったろう。どのみち何をされるかは、
これから私自身が味わうことなのだから。

「いや、いや……、た、助けて……、助けて……」
「クカカカカカカカ……」

黒い影はその不気味な口を大きく開き、腐臭を撒き散らしながら私の頬を舐めた。ビクンツと震えた私を見て、黒い影は愉快そうな笑みを浮かべた。

な、嬲られている……。

追われている時から予感があったが、この化け物は獲物を怯えさせることを楽しんでた。殺されるだけでは済まない。まるで人間を玩具のように嬲って、散々怯えさせて恐怖させて絶望させてから、ムシャムシャバリバリと食ってしまうのだ。

ついに我慢していた恐怖の臨界点を突破した。

「い、いやアアアアアツ！！ 嫌々嫌々……、助けて、助けてツ
！！ 止めて、止めて、止めてエエエエエツ！！ 嫌アアアツ！
！ お願い、殺さないでエエエツ！！」

「クカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカツ！！」

黒い影がこれまで一番大きな声で笑った。

恐ろしい怪物から逃げようと必死に暴れるが、黒い影の力はあまりに強かった。振り払うことなど出来るはずもなく、無理に抵抗をすれば骨が折れてしまいそうだった。

逃げられないのはわかっている。

だけど、逃げなければ徹底的に髑られて殺されるだけだ。

どうして、こんな化け物に襲われる羽目になったっていうの……？

突然訳のわからない世界に放り込まれ、正体不明の化け物に蹂躪される。そんな理不尽があつていいのか。昨日までの当たり前前の日常はどこに行ってしまったっていうのか。

「なッ……！？ い、嫌……、止めてッ！！」

私の両足を掴んでいた黒い影の手が、いつの間にか私の胸部と臀部を舐めるように撫で回していた。制服の隙間から手を入れられ胸を揉みしだかれ、スカートの下に潜り込んだ手はいやらしくお尻を撫で擦っていた。

まさか欲情しているというのか。私はこんな人間ですらない怪物に犯されるのか。

嫌……、絶対に嫌だ……。

ぶわつと恐怖と嫌悪感と噴き出し、半狂乱になって暴れた。殺されるだけならまだしも、女の子として一番大事な時まで奪われるなんて耐えられない。おぞましい化け物に穢されるくらいなら死んだ方がマシだった。

だが、抵抗が無意味であることはすでに思い知っていた。

どれだけ必死に足掻いても黒い影は振り切れず、私が泣きながらもかく姿を見て黒い影は歓喜の雄叫びをあげていた。こんな屈辱と恥辱は他にないだろう。

こんなの、こんなのは絶対に嫌だッ！！

誰か……、誰か助けてよッ！！
お願い、 ッ！！

「フギヤアアアアアアアアアアアアッ！！」
「……えっ？」

何が起こったのか一瞬では理解できなかった。

鼓膜を破らんとする不快な悲鳴が耳を衝き、同時に私に押し掛かっていた黒い影の重量が突如消え去った。視線を上げてみると、そこには腐臭を撒き散らすおぞましい黒い影は跡形もなく消えていた。

一体、何が起こったのかと理解する必要はなかった。
とにかく助かったのだ。今はそれだけで充分だった。

心臓が壊れそうになる恐怖から解放され、私は全身を弛緩させて、その場で大の字になった。しばらく地面に寝そべっていたが、いつまでもここにいられなかった。私は疲れ切った体に鞭打って、のろのろと立ち上がった。

怪我がないか確認するために自分の身体を見ると、黒い影に掴まれた両足にくつきりと手形が残っていた。気持ちが悪かったが、放っておけば手形は消えるだろう。

「……誰かが助けてくれたの？」

周囲を見渡しながら、私は期待した気持ちで呟いた。

しかし、誰の姿も見当たらず、校門付近は完全な無人だった。

誰かが助けてくれたのは間違いないはずだが、周囲には影一つなかった。先程まで私を襲っていた黒い影さえ消えていた。あの影の怪

物がいないのは構わないが、私を助けてくれた何者かの姿もないというのは、どうということなのだろうか。

まさか、自分の中に秘めたる力が覚醒して黒い影を倒した……なんてことは有り得ないだろう。っていうか、今の発想もない。中二病なんてとつくに卒業したのに。馬鹿らしい考えに苦笑してしまう。

とにかく誰かが助けてくれた。それだけで救われた気分になった。現状わからないことだらけで危険も多いが、助けてくれる存在がいたのは心強かった。何故、姿が見えないのかは気になるが、ひとまずその人物を探そう。

「…………と、その前に…………」

校門の近くまで歩み寄り、その向こう側を見つめた。

白い境界。

他に形容すべき言葉が見つからなかった。

壁のような物質的な感じにも見えるが、手を伸ばせば通り抜けられそうだった。だからといって、この先に足を踏み出す気にはなれなかった。それは嫌悪感から来る感情だけではなく、何か本能的なものでここから先にはいけないと感じられた。

やっぱり、この世界は異常だ……。

今更ながらそう痛感した。白に塗り潰された夜空、黒い輝きを放つ三日月、人間を襲う影の化け物。そして、この異世界の中にあるのは、学校だけ。

「一体何なの、この世界は……？」

理解できないことが多過ぎる。そして、全てのことが突然だった。私は白い境界を一睨みして、先程自分を助けてくれた人物を探すために校舎を指した。目指そうとしたが、その歩み足はすぐに止まってしまった。

「さっきまでは何もいなかったのに……」

それは間違いなく確認した。

確かに数秒前までは誰もいなかったし、何もいなかった。

予想外だったのは、黒い影が地面から生えてくる存在だったということだ。

地面に黒い汚泥が広がったかと思うと、その汚泥がニユルリと起き上がって人間の形を取った。幾つもの影も、幾つもの汚泥が広がり、そこから無数の影が這い出た。

一体だけで手に負えないのに、今私の目の前にいる黒い影の数は二十を超えていた。しかも、逃げ道を囲むように横一列に並んでいた。私の背後は校門、その先は白い境界。逃げ道は前方の校舎方面にしかなかった。そこを二十体もの影が道を塞ぐように立ちはだかっていた。仮に校門の向こう側に行けたとしても、簡単に追い付かれることは先程の逃走で思い知らされていた。

だ、駄目だ……。殺される……。

いや、殺されるだけでは済まない。人間としての尊厳、女としての純潔、それら全てを徹底的に剝られた上で、無残に生きたまま肉を引き裂かれて食われる。

絶望が臨界を突破して、私の身体は鉛のように重くなった。人間一人分の鉛はそのまま崩れ落ちて、近付いてくる死から目を背けるように俯いた。

……その時だった。

「小夜子ッ！！」

「えっ……？ この声は……」

耳馴染みのある声が聞こえ、私は弾かれたように顔を上げた。すると、そこは黄金の閃光に満ちていた。

その圧倒的な光を前にして、私の脳裏にある記憶が蘇った。あれは以前、家族旅行した時だったと思う。田舎の電車から見た秋の稲田。見渡す限り、黄金に輝く稲穂が広がっており、とても幻想的な光景だった。まるで今目の前に広がる光景と遜色がないくらいに眩い光に満ちた景色だった。

ああ、これは稲妻か……。

そう理解したのは、黄金の光が消えた後だった。

地上を迸った稲妻は二十体以上いた黒い影達を焼き尽くした。稲妻に焼かれた黒い影達はまるで割れた風船のように弾け、塵一つ残さずに消滅した。

黒い影が全て消え去り、残ったのは一人の女子生徒だけだった。

「……み、実乃里？」

「やほ〜 無事でよかったよ、小夜子」

いつもと全く変わらない陽気な笑顔を浮かべていたのは、親友の常盤実乃里だった。

いつもと違うのは雷光を纏った金色の長槍を手にしていたことだった。

「い、今の実乃里が……？」

「うん。なんかね〜、こつちの世界に来たら目覚めた」

相変わらずの軽いノリだ。それでこそ実乃里だ。

常盤実乃里。私と同じ一年生ながら陸上部の短距離走のエースだ。彼女を一言で表すと、黙っていれば可愛い奴、だった。

髪は肩まで伸ばしたセミロングで、ヘアピンで軽くアクセントをつけていた。二重の大きな瞳で、鼻は少し低めで幼げな顔立ちだった。加えて身長も平均より大分低めのロリっぽい感じ。黙っていれば、とても可愛くて頭を撫でたくなるタイプだ。しかし、何かと騒動を起こすトラブルメーカーであり、口を開けば殴りたくなるタイプだった。

「えっと、実乃里……、もっと最初から具体的に言ってくれると嬉しい」

「うんうん、わかってるよ。でも、私だって正直わからないことだらけだし、小夜子の疑問には半分以上答えられないと思うよ。っていうか、そもそも小夜子がここにいるのが謎だし」

「そんなのは私だって聞きたいよ」

気付いたら、こんな訳のわからない世界に放り込まれていた。しかも、影の化け物には襲われるし。わからないことだらけで、もう本当に泣きそうだった。

「や、そういうことじゃなく……。まあ、いつか。とにかく会えて嬉しいよ、小夜子。それに、間に合ってよかった」

電撃で焼け焦げた地面を見つめながら、実乃里は心底安堵したように微笑んだ。

彼女もこの世界にいたのなら、当然あの黒い影達のことを知っているだろう。奴等がどういう存在で、私達に対してどんな非道な真似をするかを。

実乃里の助けが少しでも遅れたら、と思うと背筋が再び震え出した。

「ねえ、実乃里、貴方の他にもこの世界には誰がいるの？」

「……うん、いたよ」

過去形で彼女は言った。それが意味することは、敢えて説明するまでもないだろう。お願いだから説明させないでほしい。」

「まあ、詳しい話はあとにしよう。あつ、ほら、真も来たし」

「真つて……。近衛君？」

実乃里の答えを聞くより早く、視界の端にヒョロっと背の高い男子生徒の姿が見えた。

彼は実乃里の幼馴染、近衛真君だ。実乃里を通じての友人なので、実はそれほど親しい相手ではなかった。

身長は男子の平均より少し高めだが、全体的に細くて読書が似合いそうな文系男子だ。顔立ちも柔和で穏やかな笑顔が似合う女顔だった。女つぽく映るのは、後ろ髪が肩よりも長いことが原因かもしれない。

ああ、ちなみに実乃里と近衛君は多分両想い。でも、実乃里の方が素直になれないタイプだから、まだ付き合う関係には至っていないかった。近衛君も結構奥手で、全く押さないタイプだから。

「はあ、はあ、はあ……。やっと追い付いた……」

「近衛君もこの世界にいたんだ」

「はあ、はあ……。う、うん……。国崎もいたんだね……。無事でよかった……」

近衛君はナチュラルに私の手を掴み、喜びを露わにする。

こういう風に自然に優しさを表現できるのは彼の美点なのだが、少し悪い言い方をすると八方美人つぽい。多分、彼自身にはその自覚ないだらうけど。

だからこそ、実乃里は少し不満そうだった。好きな男の子が他の女に目を向けていけば、腹立ちもするのは当然だ。

「何、息荒立ててるの？ 変態なの？」

「だ、誰が変態だよ！ 全く、君って奴はもう……」

「はいはい、お説教は後でね。今は小夜子を安全な場所に案内する

のが先でしょ」

可愛らしく頬を膨らませる実乃里。

その反応は微笑ましくもあり、じれったくもある。もっと別の方法で自分の感情を伝えればいいのに、と思う。しかし、素直になるということは恋愛において最大の難点だった。そう簡単にいかないのは十二分に理解しているつもりだった。

実乃里はズンズンと校舎に向かって歩いていき、私と近衛君は慌てて不機嫌そうな彼女の後を追った。

T o b e c o n t i n u e d

第二夜 異世界の現実

校舎に向かう途中で近衛君が大まかな事情を説明してくれた。

まず、この世界の呼称は、便宜的に『白夜の世界』としていらしい。正確な名称は不明だが、呼び名がないのは不便ということで決めた名前だ。しかし、白く塗り潰された夜空は、本当の白夜よりも、その名に相応しいかもしれない。もっとも、本当の白夜には影の怪物など現れないだろうが。

実乃里達がこの白夜の世界で目覚めたのは、数時間前のことだったらしい。

彼女達を含め、私以外の生徒達は全員、体育館で目を覚ましたようだ。体育館には天井があつて空が見えない。だから、最初は世界の異常に気付いてすらいなかった。しかし、皆が一様に折り重なって倒れていた姿は異様だった。

しかも、この世界の体育館内にいたのは生徒だけであり、教師の姿は一人としていなかった。何故か子供達だけがいる世界。だが、ここがネバーランドのように夢に満ちた場所でないのは確かだった。

何故、自分達は体育館で倒れていたのか。

何故、教師達が誰一人としていないのか。

誰もその疑問の答えを持ち合わせていなかった。この異世界に放り込まれる直前の記憶が全員になかったのだ。気付けば体育館にいて、気付けば大人達は消えていた。動揺や恐怖が広がっていき、体育館は一時騒然とした。それを鎮めるために生徒会長は壇上上がり、

ひとまず落ち着いてほしいと訴えた。

黒い影が彼等の前に現れたのは、その時だった。

しかし、その時はまだ私が見たような人間の形をしていなかったらしい。黒い球体というべき存在で、最初は誰もそれが危険な存在とは連想できなかった。

その黒い球体は生徒会長の背後から現れ、ふわふわと風船のように浮かび、突然弾けた風船ガムのように広がり、生徒会長を呑み込んだ。

生徒会長のくぐもった悲鳴と、骨が碎かれる音がマイクで拡張され、体育館中に響き渡った。あまりに突然で現実離れた光景だったため、それが生徒会長の死と結び付くのに数秒掛かった。

黒い球体は生徒会長を呑み込むと人の形となった。
人を食らうことによつて、黒い影は人の形を得たのだ。

これは近衛君の推論らしいが、あの黒い影は人を食べることでその知識や情報を得て、進化している可能性がある、とのこと。彼等はその後、何度か黒い影に襲われたそうだが、新たに現れるたびに彼等が人間染みてきているように感じられたらしい。

……確かに、ムカつくくらいに人間染みていた。貞操の危機だったし。

とにかく最初に黒い影が現れた時の衝撃は相当なモノだった。いや、衝撃的だったのは、目の前で人を殺されたことが、だろうか。どちらにせよ惨劇を前にして、悲鳴と怒号、混乱の大合唱が起きた。パニックとなつた生徒達は我先にと体育館から逃げ出した。無論、数ヶ所しかない入口に数千人の生徒が殺到すれば、どんなことにな

るかは説明するまでもない。

幸い、実乃里と近衛君は入口のすぐ側にいたため、何とか入口が人間の栓で閉じられる前に脱出することが出来たそうだ。

その後はどこをどう走ったかも記憶にないそうだ。気付けば、どこかの教室に二人で逃げ延びることが出来た。そこでようやく空の異変に気付いたらしい。

二人は相当に幸運な部類だったようだ。

大半の生徒は体育館で黒い影達に貪り食われたそうだ。

しかし、体育館にいながら生き残れた者達もいた。それが実乃里のような不思議の力に目覚めた者達、『ウェイカー覚醒者』だった。

覚醒者。

それは幻想を具現化したような能力を手にした者達。

彼等の力は黒い影を退けるだけの強さがあった。一方的に殺されるのではなく、反撃も出来るとわかった生徒達は次第に希望を取り戻していった。

覚醒者は同じ力を持った者同士で協力し合い、幾つものグループを形成していた。実乃里達もそうしたグループの一つに加わり、今はこの世界から脱出する方法を探っていたらしい。

そして、その途中で私を見つけたようだ。

「……ねえ、実乃里。今一つわからないんだけど、ウェイカーって何？」

覚醒者については本人から聞いた方がいいと思って、実乃里に尋ね

てみたのだが……。

「さあ？」

「さあ、って……。もう少ししないの？」

「だって、私もよくわかんないんだもん」

話を聞く相手を間違えた。やっぱり、近衛君に話を聞いた方がよかった。

「……近衛君」

「まあ、実際よくわかってないのは本当だよ。この世界にいる人間の何割かが、実乃里みたいに不思議な力を使うようになったんだ。覚醒者の能力は千差万別、本当にいろんな能力があるんだ。武器を生み出す者もいれば、魔法みたいな力を使う者もある。実乃里はその両方が使えて、『電撃』と『武器形成』の二つが出来る。他にも特別な条件下でしか能力が使えない者とか、ちょっと形容しがたい能力を使う者だっている。ただ、共通しているのは、覚醒者となると運動能力が飛躍的に増すことかな」

「今の私が本気で走れば、もうほとんど目に映らないくらいに速いよ」

ピョンピョンと飛び跳ねながら、嬉々と言う実乃里。冗談にか聞こえないが、多分本当のことなのだろう。

「……今の本当だから。実乃里のスピードは覚醒者の中でもトップクラスで……」

「……わかってる。どうして実乃里が言うと何かも冗談に聞こえるんだろ？」

私と近衛君はこの期に及んでも軽いノリの実乃里を見て、深々と、本当に深々と溜め息を吐いた。

「人の顔を見て仲良く溜め息吐くな！ 何だよ、あんた等は！」

「……それで、近衛君、覚醒者になる条件みたいなのはないの？」

勝手に怒っている実乃里を無視して、私は近衛君に話の続きを促した。

「それも、わかっていない。ただ、奴等に追い詰められて極限状態になった時っていうのが一番多いパターンだね。実乃里もそうだった。今のグループに合流する前に一度黒い影に襲われて、……覚醒したんだ」

そう教えてくれた近衛君の顔は少しだけ物憂げだった。実乃里は覚醒者となり、近衛君は覚醒者になれなかった。そのことに対して感じ入ることがあるのだろう。

「……好きな女の子に守られてばかりってのは、男の子として嫌なんだろうな……」。

まあ、覚醒者になれない以外にも不安な理由は幾つもあるだろう。いつ奴等が襲ってくるかわからない状況で戦う力がないのは不安極まりない。

私だって出来ることなら、覚醒者の力があってほしかった。そうすれば、もうあんな怖い目に遭わずに済むはずだ。

「じゃあ、さつき襲われた時に能力に目覚めなかった私は、覚醒者になる資質がないのかな？」

「……それはまだわからないよ。覚醒する条件だって、必ずしも奴等に襲われている時じゃないみたいだし。多分、まだ……」

近衛君は認めたくない現実を拒むように苦々しそうに言った。

きつと力が欲しくて仕方ないのは、私ではなく近衛君なのだろう。だからこそ、まだ覚醒者になれる希望を捨てたくないと思っているはずだ。

私は彼を元氣付けるためにも、私自身もまた諦めないように、努めて明るくこう返した。

「うん、そうだね！ まだ可能性はあるよね！」

「国崎……。そうだね、きつとまだ希望はあるよね」

私達はどこにあるかもわからない小さな希望を信じて微笑み合った。近衛君とは実乃里を通して長い付き合いだったが、こんなに近衛君と気持ちが一緒になれたのはこれが初めてだった。嬉しくもあり、こそばゆい感覚だった。

「うがあああああッ！！ 私を無視して二人仲良く話すなアアアッ！！」

「わふっ!?!」

実乃里が背後から私の頭を潰すように飛び掛かってきた。勢いのあるアタックだったため思わずつのめって、危うく床にディープキスをするところだった。

今はずでに校舎内に入り、床はリノリウムの廊下になっていたが、それでもキスをした相手だとは思わなかった。

「こんにやる〜……、と思ったが、近衛君を取られまいとする可愛い嫉妬なので許してやることにした。」

「く、国崎、大丈夫!？」

「うん、大丈夫。問題なし」

「実乃里、君って奴は本当に突拍子もないことをするね。いい加減、その癖は治らないのかい？」

「ふん！ それより、もうすぐ我等が秘密基地に到着するよ！」

実乃里は私の肩に両手を置くと、そこを支点にヒョイと宙返りをし、リノリウムの廊下に着地した。跳び箱みたいな扱いをされた私はグラツと体勢を崩し、また床にキスをしそうになった。さすがにこれにはイラツとした。

「コラ、実乃里！」

「小夜子のノロマ！ 置いていつちゃうからね！」

廊下を駆けていく実乃里を追って、私も拳を固めて走り出した。やはり、あの小娘は一発殴っておかないといけない。

新校舎三階の廊下を駆けていき、突き当たりの特別教室に辿り着いた。

実乃里達のグループが拠点としていたのは視聴覚室だった。あの教室は普通の特別教室よりも広いので、今あるグループの中でも最大人数を誇る実乃里達のグループも全員が入ることが出来た。

グループの人数は確か、四十七人。そのうち覚醒者は三十一人。こ

れだけの人数がいれば、また黒い影が現れても絶対に大丈夫だ。

ただ、そう漠然と思っていた。

だから、実乃里と一緒に教室に入った時、その現実をすぐに受け入れられなかった。

「な、なな……、何……、これ……？」

「……じよ、冗談でしょ？ これじゃあ、何人やられたのかさえわからないじゃん……。っていうか、有り得ない……。こんなの、絶対に……」

私達の視界に飛び込んできたのは、一面の深紅色だった。

一体何が起こったのか思考が追いつかなかった。

これは何……？

突如停止した思考を再起動させ、今日の前に映る光景を理解しようと努めた。

視聴覚室の床、壁、天井、窓に至るまで赤いペンキのような物で塗りたくられていた。他の色など入り込む余地がないほどに、ただ深紅色に染め上げられていた。ペンキのような塗料の合間には、粘土のように張り付けられた赤い塊もあった。

ああ……、こんなに赤い塗料は一体何なのか。

このむせ返るような生臭さは何によるものか。

考える……、この鮮烈な赤の正体は一体何なのか考える……。

いや、考える、ではない。認める、だ。初めから答えはわかっているのに、別の回答を求めて小難しい式に挑戦しようとしていた。数

学的には、一足す一が二にしかならないのに、他の捻くれた回答を出そうと思いを巡らせていたのだ。

それは本当に愚かなことだった。私の苦手科目は数学なのに、どうしてそんな無駄な公式探しのような真似をしていたのだろうか。初めからわかっている答えを出すんだ。

これは、血だ……。

それも数人程度では済まない量だ。

実乃里達のグループが四十七人だそうだが、それでも足りるかわからない量だ。

撒き散らかった血の量に比べ、骨肉や臓物が極端に少ないのは簡単な理由だ。奴等は私達をバリバリムシヤムシヤと生きたまま食うのだ。

この血は全て奴等の食い残し。

これだけの量が……、特別教室の一面を完全に塗り潰せるくらいの量にかかわらず、これら全てが食い残しなのだ。

「う、ううう……ッ!! ぐう……」

咄嗟に口元を押さえて、胃が引つ繰り返りそうな嘔吐感を堪えた。目から涙は零れても、嘔吐だけは必死に抑えた。そして、私は生まれたての仔馬よりもブルブルと震える足で数歩を後退り、赤に染められていないリノリウムの床に尻餅をついた。嘔吐感は何とか抑えられ、両手を口元から離して大きく息を吐き出した。そこまでが私の限界だった。もう完全に腰が抜けて立ち上がれそうになかった。

嘔吐を堪えられた理由は多分、この教室がほとんど血だけだったからだろう。赤いペンキで塗りたくられた部屋と思い込み、現実を否定すれば何とか堪えられた。

多分、残り物がもつと多かつたら駄目だっただろう。

……ごめんなさい。今の発言は不謹慎だった。ここで殺された人達のことを思えば、そんな言い方はあんまりだろう。駄目だ、すっかり気が動転してまともな思考力が働かなかった。

「小夜子、大丈夫!？」

実乃里は私に駆け寄り、心配そうに私を見つめた。

「だ、大丈夫……。二人からいろいろ聞いて覚悟はしていたし、ここに来る途中だって、その……。血の跡はたくさんあったし……」

恐怖で体中が引き攣りながらも、私は何とかそう答えることが出来た。

敢えて目を背けていたが、校舎内には点々と血溜まりが出来ていた。それはまるで雨が降った翌日に出来る水溜まりだった。この校舎に幾度となく降ったのだろう、惨劇という名の血の雨が。

それを見ていたからこそ、今この光景も耐えられたのかもしれない。

「馬鹿! 強がらなくてもいいんだよ!」

実乃里は私の視界を塞ぐように、私の頭を抱えて優しく撫でてくれた。

「……実乃里」

「大丈夫、小夜子は私が守るから! もう怖い思いはさせないよ!」

「……ありがとう、実乃里」

実乃里の励ましのお陰で少しだけ心が軽くなった。

「……引き返そう。どこか他のグループに合流するんだ。国崎、立てる？」

近衛君は視聴覚室の戸を閉じながらそう言った。

この視聴覚室で何があったのかは問うまでもない。黒い影達にやられたのだ。しかも、覚醒者が何十人もいたのにもかかわらず。

黒い影達は人間を食うことで進化している。覚醒者よりも強い奴が現れ始めたのだ。

そんな化け物と遭遇したら、私達の力ではどうにもならない。ここに居続けるのは危険極まりないだろう。

私は立ち上がろうと試みたが、やっぱり腰が抜けていたため立ち上がれなかった。

「うう……、駄目っばい」

「じゃあ、仕方ないね。僕が背負っていくしかないか」

「なッ!? 真がッ!? あんたみたいな細腕じゃ無理に決まってるでしょ! 背負うなら私が……」

「唯一の戦力である実乃里の両手を塞ぐことなんて出来ないだろう」

ヤキモチモードの実乃里が顔を真っ赤にして主張したが、真剣な顔をした近衛君は極めて冷静にそう返した。

「うつ……、それはそうだけど……。むむう……」

恨みがましい目で実乃里に睨まれたが、私にはどうしようもなかった。立てないものは立てない。

「ほら、国崎、おぶさって」

「えっと、ごめんね……」

近衛君には迷惑をかけて、ごめん。

実乃里には近衛君にこんなことさせて、ごめん。

私は近衛君の背中によじ登り、しっかりと捕まった。それを確認すると、近衛君はフラフラと心もとない足取りで立ち上がった。

……私と近衛君の名誉のために言っておくが、おんぶつてのは結構大変なのだ。漫画や小説みたいに人を抱えたまま行動するのは辛いのだ。

……何が言いたいかというと、私は決して重くない。

「ぶうぶう……」

「ほら、不貞腐れてないで行くよ。ここから一番近いところだと、職員室にいるグループかな。あそこも人数が多いところだし」

「ふん！ じゃあ、行くよ！」

不機嫌そうに鼻を鳴らした実乃里は、私を背負っている近衛君のことを考慮せずに大股で歩き出した。それを近衛君は頼りない足取りで追った。……私は重くないから。

職員室は視聴覚室の真反対の位置あった。新校舎自体がかなりの広さだが、それほど歩くような距離ではなかった。

「ねえ、近衛君。今、覚醒者の数はどれくらいなの？」

「うーん、正確な数はわからないよ。今は幾つものグループが出来ているし、それぞれが別行動をしたりもするしね。今生き残っているのが大体二百人足らず……、いや、もう百五十人を切っているかな。……その中で覚醒者はその中の六、七割くらいだよ」

「……………」

それを多いというべきか、少ないというべきか判断に迷った。

霞ヶ原高校はマンモス校だ。全校生徒の総数は三千人以上に上る。

そして、今生き残っているのは推定でも百五十人以下。……えっと、だから今の人数は元々の何パーセントなんだっけ（約五パーセント）？ とにかく九割以上の生徒が犠牲になっている。

犠牲者の数を考えるならば、この覚醒者の数は多いというべきなのか。それとも少ないというべきか。

「力が欲しい……。僕はいつも実乃里に守られてばかりで何も出来ない……………」

「近衛君……………」

彼の焦る気持ちはよく理解できた。

私達は何の力もない無力な人間だ。あの恐ろしい黒い影に抗う術もない。しかも、抗う力のある覚醒者であっても、勝てないような敵も現れ出していた。私達だけが置いてけぼりにされている。

いや、近衛君が焦っているのは、そういうことじゃない。

大切な女の子が一人矢面で戦っているのに、何も出来ないことが悔しくて仕方ないのだ。危機は次第に大きくなっているのに、守ることさえ出来ない自分が不甲斐ないのだ。

「奴等はどんどん強くなっている。実乃里だって危ないんだ」

「うん……。もどかしいね、何の力にもなれなくて……」

「守りたいんだ。大切な女の子一人くらい」

近衛君の視線が少し前を歩く実乃里に向かっていているのはわかる。

だけど、彼がどんな表情をしているかは、私の位置から見えなかった。少し身を乗り出せば、彼がどんな表情を見えるかもしれないが、それは多分しない方がいいだろう。きっとその表情を見ていいのは、実乃里だけだ。

「……近衛君も男の子なんだね。でも、無茶しちや駄目だよ。近衛君が実乃里を守りたいって思うのと同じくらい、実乃里だって近衛君を守りたいって思ってるんだから。」

だから、生き残ろう？ 生きて、また元の世界に戻って、いつもの生活に戻ろうよ」

「……ありがとう、国崎……」

近衛君は首を少しこちらに向けて、優しい笑顔を浮かべた。

こんな優しい人に守りたいと想われている実乃里は本当に幸せ者だな、と思う。

「あれっ……？ 実乃里……？」

「……………」

先を歩いていた実乃里が職員室の扉を開けたままの状態で固まっていた。

何故……？ と理由を考えかけたところで、先程の視聴覚室の惨状が脳裏を過ぎった。まさか、あれと同じことになっているのだろうか。

近衛君も同じ考えに至ったようで、駆け足で職員室に向かった。

しかし、そこには予想したような鮮烈な赤など一切なく、数人の生徒達がいるだけだった。ほっと安心したのも束の間、私はすぐに彼等の違和感に気付いた。

……眼球がないのだ。

眼窩の向こうには、深い深い闇が広がっていた。

私達はこの闇の正体を知っていた。この世界に巣食う黒い影の化け物だった。

ま、まさか殺した生徒の皮をかぶって……、人間に成り済ましていくというのか……。人間をどれだけコケにすれば気が済むんだ、こいつ等は……。

殺された上に皮まで剥がれた、その名もなき生徒達のことを想うとハラワタが煮え繰り返った。多分、この時初めて私は黒い影に恐怖以外の感情を覚えた。

こんな奴等を許しておけない。

「ヤあ、君たちも無事だツタのかイ……？」

「……ッ!？」

進化を続ける黒い影がついに喋り出した。

この化け物が紛れもなく進化していると知り、背筋が震え立った。

「助けて……、怖い怖い怪物に襲われルンダ……。一緒に逃げヨウ……？ に、逃げよう……。一緒にイイ……」

「……ふ、ふざけんな！！ 皮を被ったくらいで人間を気取るな！！ 怪物はお前等のことだろうが！！ 人間を馬鹿にするな！！ 出る、黄金槍エクレールツ！！」

実乃里の怒りに呼応するように黄金槍エクレールが顕現する。

黄金の槍と共に進む稲妻は周囲を徹底的に焼き払っていく。荒れ狂う嵐のような稲妻だったが、それは私達のいる場所を正確に避けていた。実乃里が稲妻の力を完全に制御している証拠だ。更に、実乃里が槍を振るうと、その全ての雷は三叉の穂先へと凝縮されていた。

収束した電撃はとても正視できないほどの眩さを放った。

実乃里がエクレールを突き出すと、鼓膜を震わす轟音と共に稲妻が人間の皮を被った化け物達を呑み込んでいった。

間近で見た実乃里の能力はまさに凄まじいの一言に尽きる。

徐々に雷光が消え、ようやく眩しさで麻痺していた視力が戻ってきた。そこには焼け焦げた職員室が映り、人間の皮を被った黒い影は跡形もなく……。

「う、嘘……？」

職員室の入口から半分は完全に焼け焦げていた。

しかし、もう半分はまるで何事もなかったかのように無事だった。人間の皮を被った黒い影達も健在だった。

一体何が起こったのか……？

その原因はおそらく先程までいなかった人物のせいなのだろう。

職員室の中心、入口からその人物の手前まで電撃によって室内が焼け焦げていたが、その人物より後ろは一切の変化なく以前の状態を保持していた。

ならば、その人物が何かしたと考えて間違いない。

そして、私達はその人物のことを知っていた。その人物は黒い影ではなく、私達がよく知る人物だったのだから。

「職員室で暴れるとは、相変わらず君の素行には困ったものだな、常盤？」

「……む、武曾……？」

私達のクラスの担任であり数学担当の教師、武曾。

武曾はまだ若く顔立ちのいい教師のため女子からの人気は高かった。しかし、私も実乃里もこの二枚目教師があまり好きではなかった。理由はわからないが、どうも生理的に受け付けなかった。

年齢は三十代半ば。瘦身長躯で眉目秀丽、眼鏡を掛けた落ち着いた秀囲気を持っていた。常にシニカルな笑みを浮かべており、彼に心酔する女子達は素敵と持て囃していたが、私には嘲笑われているとしか感じられなかった。

今もそのキザったらしい笑みを浮かべているが、その瞳は肉食獣のように爛々と輝いていた。

「武曾先生、だろう？」

「……どうして、大人はこの世界にいないはずなのに……」

「いないはず？ どうしてそんなことが言い切れるんだね、近衛？」

「そ、それは……」

言いようのしれない武曾のプレッシャーに思わず近衛君は口ごもった。

近衛君はあまり人のことを嫌うようなタイプではないので、特に武曾のことが嫌いとは聞いたことがなかった。しかし、今の武曾から発せられる不吉な気配に思わずたじろいでいるようだった。

「私達はこの世界を隈なく歩き回ったし、大人がいるという話は全く聞いてない！ それなのに、あんたがここにいるのは変よ！」

近衛君に代わって実乃里がそう言い返した。

「それに……、どうしてそいつ等を守るような真似をしたの？」

そう、それが一番の疑問だった。

武曾は人間の皮を被った黒い影を守るように、私達に立ちほだかっていた。

あの黒い影達は人間の敵だ。人間を食らうことによつて知性を増していく恐ろしい怪物だ。どうしてそれを庇うのか。それに、どうして武曾は黒い影に背を向けているにもかかわらず襲われていないのか。捨ておけない疑問は幾つもあった。

だからこそ、私達は武曾に対して底知れぬ恐怖を感じていた。

「生徒を守るのは、教師として当然の義務だろう？」

「ふざけんな！　それが人間じゃないのは一目瞭然でしょうが！　大体、あんたみたいなクズがそんな真似する訳ないでしょ！」

クズとはいささか言い過ぎが、武曾はあくまで自分のことが至上であり、少なくとも生徒のために身を張るようなタイプには見えなかった。

「やれやれ……。国崎と近衛も同じ意見かな？」

「……………」

私達は積極的にその言葉を否定はしなかった。だから、それは無言の肯定だった。

「全く、毎日身を粉にして生徒達に尽くしているというのに、肝心の生徒達からは欠片ほどの信頼も得ていなかったとは……。全く全く、全く以って悲しいな……………」

「はっ！　身を粉にしているのは、女子に粉かけるためじゃないの？　信頼がないのは当然だよ、この腐れ教師！」

「……………実乃里、さつきから少し言い過ぎだから」

さすがに実乃里が暴言ばかり吐くので、保護者の近衛君が苦言を呈した。

「何だよ、もう！？　真、あんたはどつちの味方！？」

「実乃里の味方に決まってるだろう。だけど、今は武曾先生を挑発しない方がいい。とつくに無駄な気もするけど……………」

「……………ほう、覚醒者でもないのに察しがいいじゃないか、近衛」

悪意に歪んだ笑みが私達に向けられた。その瞬間、胸に燻っていた疑問など吹き飛ばして理解させられた。この男は紛れもなく私達の敵だ、と。

武曾から発せられる邪悪な気配に、魂の底から震えが起こった。殺気というモノは多分こういうプレッシャーのことなのだろう。まだ何もされていないのに、全身を針で刺されたような痛みさえ感じられた。

「物分かりの悪い馬鹿に授業など無意味だ。地獄で悪魔達の補習を受けるといい」

武曾が軽く手をかざすと、黒い影達が私達に向かって襲い掛かってきた。

実乃里はエクレールを振るおうとして、……躊躇した。

仮にも人間の姿をした相手に武器を振るう迷いが生じたのだ。今まで相手にしてきた連中は人の形こそしていたが、まるで人間とは思えない容姿だった。しかし、今襲ってきた奴等は人間の皮を被り、人間と同じ容姿をしていた。

覚醒者として不思議な力はあるがあっても、実乃里はついこの間まで普通の生活をしてきた一般人だ。人に向けて武器を振るう真似をしたことなんて……（いろいろ実乃里の素行を回送中）……まあ本気で殺そうとしたことなんて一度もないはずだ。

エクレールは振るわず、電撃を広域に散らして迫ってくる黒い影達を焼き払った。

多少知能を付けたとはいえ、まだ実乃里の圧倒的な力の前に黒い影は無力だった。人の皮や毛髪が焦げる嫌な臭いと共に黒い影は消滅した。

「ふむ……。他の覚醒者とは別格の強さだな。こいつ等でかなりの数の覚醒者を殺せたのだからね……」

今の発言は武曾が黒い影達に関与していることを認めるものだった。何故、どうして……？ 武曾はどんな理由があつて、黒い影を操っているのだろうか。しかし、最大の疑問は、どのようにして、だろう。彼の覚醒者としての力が、黒い影を生み出すことなのか。それとも、それとは全く別の力によつて黒い影を操っているのだろうか。

白夜の世界にいたことで不思議な能力に目覚めるようになった者がいるのは確かだが、そもそもこの世界が何なのかという根本的な疑問がある。

武曾は私達が知らない何かを知っているのだろうか。何故か、あの不敵な笑みには全てを見透かしているような気がした。

「武曾ッ！！ あんたが……、あんたが黒い影を操つてみんなを殺したつての！？ 私の友達を……、クラスメイトを……、見ず知らずのたくさんのお友達を……ッ！？ あんな……、あんな酷いことをしやがって、絶対に許さない！！ どうして、こんな真似をしたの！？」

「愚か者に聞かせる話などない。黙つて死に失せろ」

「……ぶ、ぶっ飛ばす！」

実乃里は黄金槍エクレールを逆手に持ちかえ、柄の方で武曾に殴り

掛かった。
覚醒者のパワーとスピードで殴り掛かれれば、たとえ柄でも過剰な殺傷能力がある。

駆けていく実乃里の背中を見て、私の不安は急速に高まった。しかし、それはこれから殴り飛ばされるであろう武曾の安否ではなかった。もっと別の何かが起きる気がして、咄嗟に実乃里を止めようと叫んだ

「実乃里、駄目！！」

しかし、その声は実乃里には届かなかった。

否、たとえ届いたとしても、頭に血が上った実乃里を止められるはずもなかった。

だから、その衝撃的な結末は必然だったのかもしれない。

「うああ……、う、嘘……？」

「残念だが、これが現実だよ、常盤？」

実乃里の背中から噴き出す真っ赤な鮮血、そして、武曾の右腕。それは私にとって眼前で初めて見せつけられた殺戮の瞬間だった。私と近衛君はあまりの衝撃によって、目の前で起きた事実を受け入れられなかった。映像として脳に渡っていたが、それを事実として承認することを拒んでいた。

「殺すには惜しいが、仕方ないな」

「……ああ……」

グチュリつと耳障りな音を立てて、武曾は実乃里を貫いた自らの腕を引き抜いた。

宙吊りにされていた実乃里は人形のように受け身も取れずに床に落ちた。彼女の傷口から溢れる命の雫は止まらない。雫はやがて海となり、職員室の床を真っ赤に染め上げた。

実乃里はピクリとも動かなかった。

血の海はただただ広がっていく。人間にあれほどの血液が入っていたのかと思えるくらいに、たくさんの血が溢れていた。

どうして実乃里が動いてくれないのか。どうして出血が止まってくれないのか。

残酷な映像は次々と流れ込んできて、私も近衛君も拒み続けていた事実を受け入れざるを得なくなった。

T o b e c o n t i n u e d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0342y/>

メアのゆりかご

2011年11月8日21時06分発行